

授業方法について独自に工夫していること

アクティブ・ラーニングを意識して、授業をおこなった。受講者をグループに分け、グループごとに作業を行わせた。その上で、全員の前で発表させた。また発表について、グループ・ディスカッションを行い、意見を述べさせた。理論的なことを説明した後、実践を行うように配慮しています。

理論的なことを説明した後、実践を行うように配慮しています。

- ・毎時プリントを配布し、教員になった後でも読み返せる資料を作成。
- ・コメントカードの記入を求め、疑問や感想等のフィードバック必ず次時にしている。
- ・理論的な考えと実践的な考えの往還ができるようにそれぞれのバランスを大切にしている。
- ・なるべく学生側の意見を取り上げ、議論ができるようにしている。
- ・学生の実態に合わせて毎年改変している。
- ・図表に表す工夫をした。が、うまくは行ってない。
- ・学生と一緒に評価について考えた。

学生には、「学生気分で出席するのではなく、教師になったつもりで出席せよ」と言っている。朗読は国語教師にとって基本中の基本であるから、子どもをひきつけられる読み方を徹底指導している。小声・早口は許さない。慣れてきたら、巡回しながらの朗読もさせている。実際教科書に載った物語教材をとりあげ、教師として到達してほしいレベルの読みを具体的かつ平易に示している。

これまでの自身の授業実践をもとに、教材研究・授業展開・指導方法など、できるだけ学校現場で活用できる内容になるよう心掛けている。

社会科研究B I の授業内容において、地理的分野に重点を置いて、授業を進めている。その中で、地図に関する技能や地理的知識の空間認識力や地理的な見方・や考え方を養成することが大切であると考えている。地理学はフィールドワークの科目とも言われ、可能な限り野外に出かけ、その中で地理的な見方や考え方など培うことが重要であると思う。しかし、授業の中で、いろんな地域へ出かけて、様々なことを観察することは困難である。そこで、授業に関係する地域の様々な事象について、可能な限りスライド等を導入して、その地域についてそれぞれが観察してもらい、地理的な見方や考え方の養成に繋がるように心掛けている。さらに、地理的な見方や考え方の実践を目指して、地域調査を課している。

- ・学校現場で展開している授業に即して、国語科の教材研究が進むように課題を焦点化した。
- ・講義形式の時間を短くし、アクティブラーニングを意識して、授業を進めた。
 - ・グループ討議・・・音読の評価の観点
 - ・実技演習・・・鉛筆の正しい持ち方指導・創作物語を「書く」活動
 - ・意見交流・・・物語読解指導における教材研究の方法
 - ・模擬授業・・・読書指導における「読み聞かせ」の方法
- ・学校現場の実践を紹介し、児童の実態を考慮しながら指導案を立てる実習を実施した。

新しい教育情報を多く取り入れ、指導に役立てる。

教育実習に出かける前の時期であることから、教育現場に出て困らないような、実践的な授業スキルを身に付けられるように心がけた。模擬指導案作成とそれによる模擬授業、事後協議会での相互検討などを取り入れた実習形式とした。

また、生徒の見方・考え方を育てる社会科授業を意識して構想をさせるために、現場の実践をまとめた図書を参考資料として活用した。

・4年生の前期に開講する科目として、授業内でのアクティブ・ラーニングに心がけ、課題発見、課題共有、重要な点の整理を行うようにし、授業外学習の負担にならないように配慮しました。
・毎時間の活動を振り返りつつ、紙のポートフォリオで学生の感想や実態を把握するように努めました。個別交流もできました。
・「学習指導要領の縦横読み」「読書方法の系譜」「教材の比較」など、比較しながら思考する練習を重ねました。
・調べたこと、考えたこと、振り返ったことなどを、教室内で対話したり、3人程度で交流し合ったりする時間を一定設けました。最終レポートでは、他大学の学生などとのコメント交流を課題としました。
・同時開講の授業担当者と協働し、図書館での自主的なワークシート作成させました。その際にも、学生の進路が明確になってきていることから、選択的課題を提示し、自主的に選ばせました。

M2 国語科研究CⅡ

古典文学の専門的な研究の動向と、現場での実践的な古典教育との間をいかにして関連付けるかをテーマに、具体的に教科書教材にそくして説明をし、指導案を作成させること。

M2 国語科研究CⅣ

教職教養として求められている教育史の知識と、国語科教育の理論と実践との歴史をいかに融合させて説明するか。また、歴史的背景とともに理解させるために、年表・図版・写真等をいかに活用するか。

①学生の実態に合わせた授業構成の工夫

1回目、2回目の授業において、学生の興味・関心・問題意識などを調査し、3回目以降の授業内容・授業構成に反映するようにしている。そのため、シラバスは、3、4回改訂する。

②学生の協働性を高める授業方法の工夫

グループディスカッションを多く取り入れたり、模擬授業の準備や発表をグループで行ったりするなど、受講生同士が学び合い、協力して授業をつくり上げる授業方法を取り入れている。

③個に対応した指導の工夫

授業づくりや持日授業の発表については、授業感想カードに朱書きをいれ、受講生の疑問や考えをできる限り把握するように努めている。

小学校社会科の授業づくりにおける教材研究のあり方を、幾つかの単元を通して、学生に「社会的事象の見方考え方」のフレームをつくらせよう、知識・技能の獲得からフィールドワークでの適応という流れで授業を進めてきた。

学生を授業の主役であると位置づけ、学生の自己追究とプレゼンテーション、意見交換を何より大切であると考えている。独自の工夫といっても、それほど珍しいものではないが、学生の小さな努力を大きく褒めることを重視した。褒めて育てるという姿勢を徹底させたつもりである。

科目の内容から、知識技術の向上より指導者になった場合の力が身につけられるよう配慮した。自らの経験を中心に、成功例・失敗例を含めて実践的な内容とした。

社会科についていろいろな面から紹介し、個々の学生それぞれの興味のあるところから、社会科について考えることができるようにと思っています。聞くだけでなく、視覚に訴えたり、グループでの活動を重視しています。

できる限り、実際の教職現場で遭遇するような事柄になるように考えながら、データ分析の状況を設定している。また、パソコンプログラムの操作を必要とするため、プロジェクターを利用して、操作過程が分かるようにした。

・新聞を用いた意見交換の場を設けた。
毎回、担当者(グループでの輪番制)が新聞記事を用いた意見発表をし、それについて議論する時間を設けた。時には全体で特定の事について共通理解を図るようにした。また、新聞教育を現場ではどのように取り扱っているかを体験させるため、「新聞切抜き作品づくり」を経験させ、グループに分かれて発表会をして、その後評価させてみた。
・指定した教科書を事前に読ませておいて、グループごとに意見交換をさせ、その後、全体でまとめるようにした。人によって読み取り方が異なることを体感させることにより、見方・考え方を広めさせた。

毎回交流の時間を設けて、自分の意見を述べたり、他の学生の意見を聴いたりして、視野を広げ、考えを深めさせるようにしています。また、90分の授業の中で、15分～20分程度でミニレポートを書かせ、学生相互で、添削やコメントをさせています。

・学生の実態、雰囲気etcに、寄り添いつつ、授業の充実をはかる。
・毎回の評価(反省、感想、思いetc)で、具体的、客観的に学生の実態を把握しながら、次時の授業構想を組む。

ほとんど毎回、まず学生自身で教材(資料)を読み比べ、気づいたこと、考えたことを書くことから始めるなど、できるだけ主体的に取り組めるように心がけている。
学生一人ひとりが、とくに自分の話し方(表現力)について、明確に意識できるように、お話の発表の機会を設けた。さらに学生自身で相互評価するようにしている。

学生個別による模擬授業を行っている。模擬授業において、学生によって持ち時間が異なっては、教育機会上、また評価の公平さの観点から、よろしくない。また学生数が多いからといってグループ代表に行わせる形は、各学生の能力伸長の機会をうばってしまうため、よろしくない。したがって各学生の授業の持ち時間、および質疑応答の時間をほぼ公平にとった(通常の中高の授業の半分の25分とした)。その条件で行うと、履修者数が多く、1コマ90分では十分に対応できないため、別の授業時間を使用することになった。